

支援を考えるうえで大切にしたい5つの視点

- 1 幼児期からの経験
- 2 安全・安心な集団
- 3 背景にある認知への気付き
- 4 必要な環境調整や合理的配慮の提供
- 5 教員や支援者の役割分担や専門機関・保護者との連携

幼児期～小学校低学年

【文字と音を結びつける力を高める時期】

小学校中学年～高学年

【語彙を広げ、自分に合った学び方の経験を積み重ねる時期】

中学校

【自分に合った学び方で文や文章の意味理解を深める時期】

体をたっぶり動かす (走る、跳ぶ、バランスなど)

- ・体全身を使ったダイナミックな遊び
- ・手や指を使う
(折る、着る、塗るなど)
- ・「できたね」「大丈夫」を増やす



文字と音を結びつける力を高める (音韻意識)

- ・しりとりなどの言葉遊び
- ・かるたやすごろく…
- ・音を聞いて文字を選ぶ
- ・言葉や文字の動作化
- ・50音表の活用



コミュニケーションを図ることに楽しさと 充実感を味わえるように

- ・実体験や写真、絵と言葉の意味を結びつける
- ・習った語彙を使って例文づくり
- ・ICT機器等を活用し、見る力や聞く力を活用しながら言語の概念を形成
- ・図やシンボルなどの視覚的な表現で考えを整理する



自分に合った学び方を 試しながらつかむ

- 例) タイトルから内容を予想する
- ・目次や見出しに注目してポイントを考える
- ・わからなくなったら重要な文を見直す
- ・要点をしばって書く
- ・キーボードや音声入力を使って自分の考えを伝える



遊びや生活の中で数量や図形、文字などに親しむ体験を

読み聞かせ

- ・文字や読むことへの興味関心を高める
- ・語感を楽しむ
- ・書き言葉にたくさん触れる



様々な感覚を使う

- ・文字の認識と「書ける」を支える
- ・見たり触ったりする体験的な活動や体験したことを言葉にしたり、学習で使う言葉と結びつけたりする
- ・手遊び

やり方を工夫すればやり遂げることができると気付けるように

テストや宿題などの工夫をする

- 例) 解答形式を「読める」→「選べる」→「書ける」などから選択できる
- ・広い行間や本人が見やすいフォント
- ・練習問題の量を調節
- ・評価は本質的なことについて
(漢字の止めはねを許容)



安心して環境の中で自分に合った学び方に気付き、必要な支援を求められるように

児童生徒が選べる手段を用意する

- ・一人一台端末やICT機器(話す、読む、書く場面での活用など)
- ・スリットや図、モデルなどの個に応じたアナログ教材
- ・課題の提出方法(ICT機器や写真など)
- ・活動に取り組む時間や場所、人
- ・自分に合った学び方を選択できる機会を確保する



「自分で読める」を保障する

- ・デジタル教科書やICT機器による拡大、ルビや読み上げ機能
- ・音声ペンやデジタイズデジタル音声教材など

話したくなる、読みたくなる経験の提供
絵本や漫画、語りや遊び

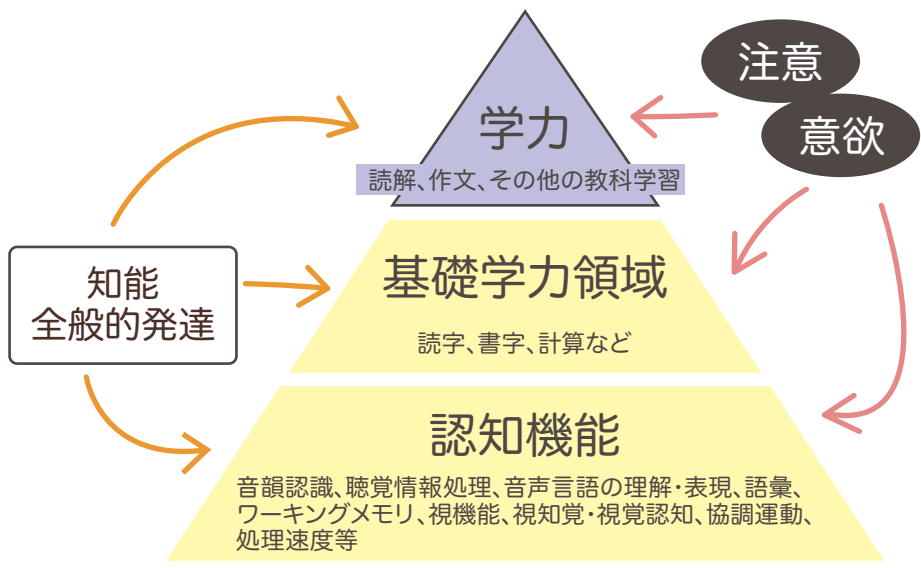
失敗しても否定せず、
次の道筋を示す

全てを先回りして整えるのではなく選択肢を示し、任せ、対話をしながら
判断を子どもに委ねる。自己決定の経験を積み重ねられるよう支援する

安心という土台から、自立した学びへ

支援者が一貫した基準と姿勢を保ち続けることで、子どもは安心して挑戦し、失敗から学び、再び立ち上がることができる。





認知機能、基礎学力領域、学力の関係の概念図

※玉井・若宮「子どもの学びと向き合う医療スタッフのためのLD診療・支援入門 改訂第2版」(2022) 診断と治療社

(例) 読み書き計算に困りのある姿

- 文章題の理解、解答が難しい
- 作文が難しい
- 数学的に理解し、立式することはできるが計算ミスをする
- ゆっくりなら読めるが、周囲の音読スピードに追い付けない
- 字形を思い出せない
- 漢字が覚えられない
- 数字を見ても「量」がイメージできない
- 計算が遅い
- 九九が定着しない
- 字の形が整わない
- 文字と音を結びつける力
- 耳から入った情報を意味と結びつけて理解する力
- 話し言葉を理解して、自分の言葉で伝える力
- 言葉の引き出しとそれを使う力
- 情報を覚えて一時的に蓄える力
- 目を動かしてピントを合わせたり、スムーズに動かしたりして、形をとらえたりする力
- 目で見えたもの、ことが何かと見分けたり、判断したりする力
- 手や足、目などをスムーズに動かして作業する力

周囲の音や情報に気を取られる

疲れやすい
やる気がなくなる



学習につまずいている子どもの“困難さの背景”に目を向けた上で、それに基づいた手立てを行うことが大切です。

一人で抱えず「チーム」で支援

- ☆学校で学習支援を“早期に”開始するためのステップ
- ①学習(読み書き計算など)の困難についての正確な評価
例)・授業の様子の観察 ・テスト、成果物の誤りチェック ・聴き取り ・その他検査
 - ②その子に合った学習支援の継続
 - ③②の評価

校内委員会で検討
特別支援教育担当教員の専門性を活かす
外部専門家に相談

(市町村教育委員会、教育事務所特別支援教育支援専任教員、特別支援学校センターの機能、発達障害者支援センターなど)

教室環境のユニバーサルデザイン(例)

- 黒板の情報を整理 (ごちゃごちゃさせない)
- 黒板まわりの視覚的な刺激を減らす
- 強調色は黄色で 下線や破線をつける
- 見やすいフォントの使用
- 情報の入り口と出口を増やす (音声・動画)

1人1台端末の効果的な活用
～個別最適な学びを支える～
文部科学省

特別支援教育編

支援ニーズや手立てのヒント

こころの病気のある子供の教育支援
Co-MaMeガイド 一適応面や心理面、
行動面に困難のある児童生徒への支援—
(令和6年6月 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所)



https://www.nise.go.jp/study/disability_list/health/co-mame/

発達障害ナビポータル
<https://hattatsu.go.jp/>

